近世西欧哲学における抽象の問題（一）

―17 世紀スコラ哲学における抽象の概念―

池　田　真　治

富山大学人文学部紀要第 75 号抜刷
２０２１年８月

近世西欧哲学における抽象の問題（一）

―17 世紀スコラ哲学における抽象の概念―

池　田　真　治*

はじめに

本稿[1]の目的は，17 世紀の西欧哲学における「抽象」（abstractio, abstrahere）の言説を調査し，その一般的使用を分析することである。その直接の動機は，近世を代表する哲学者であるデカルトやロック，ライプニッツにおける抽象と概念形成の問題を論じるに当たり，その準備作業として，17 世紀における抽象概念の一般的理解を見積もる必要が出てきたことによる。テキストを精確に解読し，概念を細かく分析するあまり，かえって煩雑に分類しすぎる傾向を有したスコラ哲学に対して，デカルト以降の近世の「新しい哲学」では，「明晰さ」や「確実性」を知性的認識の要件とし，また独自の原理と方法論に基づいた体系的哲学を志向する哲学者たちが登場する。その結果，アリストテレスの著作に関して細かい注釈上の議論をすることが哲学の本業ではなくなり，スコラの専門用語などの典拠に関してもほとんど言及されなくなる。つまり，この時代には哲学の方法ないしスタイルが大きく変容したのである[2]。

17 世紀には，こうした反スコラ的な態度をもつ新哲学の潮流が生じるが，それでもスコラ哲学は西欧の大学や学術界に根強く残存していたのであるし，新しい哲学においても，スコラのターミノロジー（術語の枠組み）は意味内容を変えつつもそのまま踏襲されて使用され続けた。したがって，用語の使用に関して，スコラにおける概念分類が暗黙的な背景として想定されている場合が多い。このことは近世哲学全体の検討をもって示されるべきことだが，本研究で扱う「抽象」という用語もまたその例外ではなく，そうしたスコラ的語彙に関する理解が，当時の哲学的議論の常識ないし前提として横たわっていたと考える。17 世紀哲学を研究する

---

*　富山大学 学術研究部人文科学系／人文学部 准教授 shinji@hmt.u-toyama.ac.jp

1）本稿は，池田真治（編）『抽象の理論をめぐる哲学史――古代から近代まで――』，「抽象と概念形成の哲学史」研究会・研究報告論集（2021 年 3 月）所収の論文「17 世紀スコラ哲学における抽象の概念」を増補・改訂したものである。また本稿は，「近世西欧哲学における抽象の問題――デカルト・ロック・ライプニッツ」の第一論文として計画された。これに続く第二論文として「デカルトの抽象理論」（同研究報告論集所収），第三論文として「ロックとライプニッツにおける抽象の問題」を予定している。なお本稿は，科研費（基盤研究 C）の研究課題 JP16K02113「抽象の問題を軸とした初期近代における数学と哲学の相互交流に関する数理哲学史的研究」の成果の一つである。

2）デカルト以降の近世哲学の方法論に関しては，次でより詳しく論じた。池田真治「ポスト・デカルトの科学論と方法論」『世界哲学史 5 ――中世Ⅲ バロックの哲学』，ちくま新書，2020 年，pp. 189−222。

からには，当時の共通了解を踏まえる必要があろう。

そこで本稿では，当時のスコラ哲学における「抽象」の定義と用法を確認する。そのためのコーパスとして，手始めに，当時しばしば参照された，いくつかの哲学辞典を取り上げたい。まず，当時のスコラ哲学の語彙を集成しておりデカルトらも参照したゴクレニウスの『哲学レキシコン』（1613）を参照する[3)]。この辞典は「存在論」（Ontologia）という用語の初出として良く知られているが，当時の哲学に与えた影響も大きい。例えばその「概念」（Conceptus）の項には，デカルトの対象的レアリタスと形相的レアリタスの区別や，精神および神の知性における範型としての観念の考えがすでに先取りされている[4)]。デカルトにおけるスコラ哲学の受容と異同を包括的に研究したものとしては，ジルソンによる古典的研究や，アリューによる近年の著作をはじめとしてすでに少なくない蓄積があるが，小論においてそのような包括的研究を意図することはできない。その代わりとして，ある一つの論点にのみ集中したい。

すなわち，本研究が注目したい独自の論点は，「抽象」およびそれに関連する用語に限定した仕方での，17世紀スコラからライプニッツまでの抽象概念の受容と変容である（その第一論文である本稿は，そのための準備として17世紀スコラ哲学に注目する）。とりわけ注目したいのは，アルノーとニコルの『ポール・ロワイヤルの論理学』（第2版：1664）の第I部第IV章，およびライプニッツの『人間知性新論』（1703−5）の序文において，真理を導く抽象として積極的に擁護される「精神の抽象」（absraction de l’esprit, abstraction d’esprit）という規定である[5)]。この「精神の抽象」に注目する理由は，彼らが精神の抽象を擁護したことだけでなく，精神によって一般抽象観念が形成されることを否定したバークリやヒュームらと対比する上でも，この概念が重要な指標となると考えるからでもある。ライプニッツもまた，自ら館長を務

3）Rudolph Goclenius, *Lexicon Philosophicum, quo tanquam clave philosophiæ fores aperiuntur*, Francofurti, 1613.

4）Goclenius(1613), pp. 427−430; デカルトの「観念」のスコラ的起源およびその受容と批判については次を参照：Roger Ariew, “Ideas, Before and After Descartes”, in *Descartes among the Scholastics*, Brill, 2011, pp. 101−125.

5）ライプニッツは『人間知性新論』の序文で，「魂は何も書かれていない書字板であるとか，思考していない魂や活動していない実体があるとか，空間の空虚とか，原子とか，物質内部に現実的に分割されていない小部分があるという」不完全な概念に由来するような無数の虚構的概念を，哲学者たちがこれまでに形成してきたとする文脈で，「こうした虚構を事物の本性は決して認めない」としつつ，次のように述べる。「われわれの無知や，感じとれぬものに対して払うべき注意の欠如のゆえに，それらの虚構が生じてしまうが，こうした虚構は精神の抽象（abstraction de l’esprit）に限るのでなければ容認できないであろう」。そして，われわれに意識表象されないものを，魂や身体のうちに無いと判断してしまうことは，微細な変化（ト・ミクロン）をなおざりにし，感じとれない進展を見過ごして哲学的な誤謬を招くのに対して，「気づかれない事柄がそこにあることを知っていれば，抽象は誤りでない」と主張し，精神の抽象がもつ学知への有用性を主張する（A VI, 6, 57）。

めたハノーファーの図書館に，ゴクレニウスとミクラエリウスの『哲学レキシコン』のコピーを持っていた[6)]。そして，両辞典には，「精神の抽象」という用語が明確に出現している。そこで，ミクラエリウスの『哲学レキシコン』（1662）も適宜参照し，「精神の抽象」という規定の起源とその精確な意味内容に迫りたい。最後に，ジルソンの『スコラ＝デカルト索引』（*INDEX SCOLASTICO-CARTÉSIEN*）の「抽象」の項を参照し，そこで引用されているエウスタキウスの『哲学大全』（1609）における抽象の分類の観点からデカルトとスコラ哲学の関係について簡単に触れることで，［次の第二論文で扱う］デカルトにおける抽象の概念の考察へとつなぎたい。

1. ゴクレニウスにおける「抽象」

最初に，ドイツのスコラ哲学者であるルドルフ・ゴクレニウス（Rudolph Goclenius, 1547−1628）の『哲学レキシコン』（1613）の，「抽象，抽象すること，抽象物」（ABSTRACTIO, ABSTRAHERE, ABSTRACTUM）の項目を参照する（Goclenius, *op. cit*., pp. 13−23）。参照されている人物は，アリストテレスやアヴェロエス（1126−1198），ヘイルズのアレクサンダー（c.1185−1245），アルベルトゥス・マグヌス（c.1193−1280），トマス・アクィナス（1225−1274），ベッサリオン大司教（1403−1472），ユリウス・カエサル・スカリゲル（1484−1558），ジャコモ・ザバレラ（1533−1589）やペドロ・ダ・フォンセカ（1528−1599）などである。その内容では，まず一般的な用法の説明から入り，その次に「学問における抽象」（ABSTRACTIO SCIENTIÆ），「抽象の区別」（DISTINCT. ABSTRACTI），「質料の抽象」（ABSTRACTIO MATERIÆ），「抽象物」（ABSTRACTUM），「抽象的属性」（ABSTRSCTIVÆ ATTRIBUTIONES）など，より専門的な関連語が説明される。これら関連語を含めると，全体で10頁ほどが抽象という語彙に割かれていることから，「抽象」が17世紀初頭当時の哲学の語彙として極めて重視されていたことがわかる。ここでは，主に一般的な用法を確認するにとどめたい。

まず，哲学者において，抽象すること（Abstrahere），自立離存させること（χωρὶζειν），抽象されたもの（Abstractum），自立離存したもの（χωριστὸν）は一つの仕方では言われず，（1）**適切な仕方**で言われる場合と，（2）**幾分不適切な仕方**で言われる場合とがあるとされる。（1）適切な仕方での抽象とは，実際に内在するものから抽象する場合である。例として，数学的対象が質料から抽象される場合が挙げられている。なぜならその質料には備え付けられた形相が内在するからである。したがって（1）は，普遍的な本性，つまり普遍的なもの（τὰ καθόλου, universalia）が，個別的なもの自身から抽象される場合である。これは，スコラの哲学者によって「切り離しによって分離すること」と呼ばれ，ギリシア人たちは「抽象されるものども」

6）Christia Mercer, *Leibniz's Metaphysics: Its Origin and Development*, Cambridge U.P., 2004, p. 234, note 73.

（ἀφῃρημένα）と呼んだという。欄外に「切り離しによる抽象」（Abstractio præcisionis）[7] とあり，この種の抽象がそのように呼ばれていたことが伺える。

7）abstractio præcisionis ないし abstractio præcisiva の用語は，上述のように古代ギリシアにおける「切り離し」ないし「取り除き」による部分の分離ないし抽出の考えに由来するもので，それが何らかのしかたでラテン語世界に受容されたものであろう。アリストテレスの『形而上学』に，ἀπολαμβάνω（切り離す）という用語が出てくる（第 11 巻第 4 章 1061b23）。そこでは，数学が，存在を存在としてではなく，その固有の質料のある特定部分にのみに注意することで「切り離し」て研究していることを挙げている。例えば，線または角または数などある種の量のみを，存在としてではなく，ただそれらの各々を一次元的にまたは二次元的にまたは三次元的に連続的なものとしてのかぎりにおいて研究している。他方で哲学（形而上学）は，部分的なものについて，それらの個別的な付帯的属性を考察せずに，それらの存在を存在として研究する。自然学は数学と同様に，付帯的属性を研究し，また存在する諸事物の原理を研究しはするが，それらを存在としてではなしに運動する事物として研究する。スコラのラテン語文献においては少なくとも，トマスの *De Ente et Essentia* に現れる「捨象」（præcisio）に遡ることができる。「捨象的に」（cum præcisione）とは，「その形相からはいかなるより上なる完全性も生じてこないような仕方で」ということである。例えば，「体」は，類つまり実体のカテゴリーとしての「体（＝物体）」と，事物ないし動物の部分としての「体（＝身体）」とで区別されねばならない。前者では，「物体」は３次元の指定可能な形相を持つという意味で，量のカテゴリーに属するものとしての「体」であり，その限りで一つの完全性を有する。他方で，事物や動物の部分としての「身体」は，量のカテゴリーとしての「体」の完全性を超えて，「生物（生命）」という他の完全性が付加されることが可能である。実際，「生物」は「体」に他の完全性である「霊魂」が付加されることで成り立っている。このとき，「体」という名称は，「生物」など３次元の指定可能性が生じてくる形相を有する事物を捨象的に表示できる。その際，ここでの「体」は，あくまで動物の構成的・質料的な部分として捉えられているのであり，「霊魂」は概念的に「外にある」ことになる。つまり，体の概念から霊魂の概念を除外することで，体について捨象的に考えることができる（*De Ente et Essentia*, II, 6; 稲垣良典訳註『在るものと本質について』知泉書館，2012 年，pp. 20−23）。トマスは或るものの概念から，外にある他の概念を除外する知性の働きであるこの「捨象」を，他の概念を含んだり除外したりすることなく，或るものを単純に考察する知性の働きである「抽象」と明確に区別する。マウラーによれば，「捨象とは，ある概念から何かを切り取ったり，除外したりする抽象のあり方である。他方で，抽象とは，現実に［実在的に；実際に］それに付随する特性をその概念に含めたり，あるいはその概念から除外したりすることなく，或るものについて考察することである。捨象なき抽象は，それが抽象するところのものから何も除外しないが，暗黙的かつ不確定的なし方で事物全体を含む」（Armand Maurer, note to Aquinas, *On Being and Essence*, 2nd. Rev. Ed., Pontifical Institute of Mediaval Studies, 1968, 39n）。abstractio præcisionis/præcisiva は，トマス以降，スコラ哲学の基本用語となる。例えば近世スコラでは，Pedro da Fonseca の『アリストテレス『形而上学』注解』（*Commentariorum in libros Metaphysicorum Aristotelis*, 1577−1612）や *Isagoge Philosophica* (Lisbon, 1591)，Francisco Suárez の *Disputationes metaphysicæ*（1597）に見られる（DM I, 2, 12 ; *Opera omnia*, p.16 ; cf. J.-F. Courtine, *Suárez et le système de la métaphysique,* PUF, 1990, 275f.）。また，Sebastião do Couto の『コインブラ注解』（*Commentarii Collegii conimbricensis e Societate Iesu in Universam dialecticam Aristotelis Stagiritæ,* 1606），エウスタキウスの『哲学大全』（*Summa Philosophiæ,* Paris, 1609），Johann Heinrich Alsted の *Encyclopedia*（1630, tom. 3 Philosophia Theoretica），Adrianus Heereboort の *Meletemata philosophica*（Leiden, 1654, Vol. I, p. 19），Antoine Arnauld の *Dissertatio theologica*（1682, I, 9, p. 51）にも見られる。より近代では，Christian Wolff の著作にも見られる（GW III, 142, p.19）。Antoine Arnauld と Pierre Nicole の『ポール・ロワイヤルの論理学』（*La logique ou l'art de penser,* Paris, 1664, I, Ch. IV）では，フランス語で「精神の捨象」（précisions d'esprit）と呼ばれ，「精神の抽象」（abstractions d'esprit）と区別されるが，これは抽象のスコラ的区別を暗黙的に踏襲したものにほかならない。

他方で，（2）幾分不適切な仕方では，抽象は，いかなる仕方でも内在しない／内在し得ない仕方で言われる。そのことでは，例えば，抽象された形相（forma abstracta）として，ヌースすなわち精神（mens）あるいは知解（intelligentia）を言う場合が考えられている。また，「質料から離されたまたは分離された実体（Substantia）（事物そのものre ipsa），より下位の質料から切り離された実体，または単に非物質的なもの」とある。ここでザバレラの見解が引用され，「抽象された実体とはこのもの，すなわち，そのもの自体による，個体である」（Substantia abstracta est hæc, id est, individua, per se ipsam）とされる。ギリシア語では自立離存した実体（οὐσία χωριζομτόν）と呼ばれる。欄外には，「ここで天使はそれ自体によるものである」とあるが，質料から分離自存するような抽象的実体が，この不適切な抽象との関連で述べられているのであろう。

要するに，抽象には，（1）適切な仕方として，質料から内在する形相を，あるいは，個物から内在する普遍的なものを抽象する，「**切り離しによる抽象**」と，（2）不適切な仕方として，**質料から自立離存した実体の抽象**とがある。以下の箇所で，ゴクレニウスは，第一の適切な抽象の定義または記述について説明していくが，そこで出てくるのが「**精神の抽象**」である。

ゴクレニウスは，欄外に「精神の抽象の記述」（Descriptiones Mentalis abstractionis）とある箇所で，ザバレラが能動精神について論じた文献[8]を指示しつつ，抽象を次のように定義している。

> 抽象とは，それによって感覚像または表象から普遍を切り離し，かつ，その普遍をあらゆる質料の条件から剝ぎ取る，知性の作用である。[9]

ここでは抽象は，感覚像ないし表象から普遍を切り離し，それからあらゆる質料的規定を取り除く知性のはたらきとして理解されている。これに続けて，複数の定義が列挙される。

> 抽象とは，質料のあらゆる条件から普遍を分離することである。あるいは，個物から，したがって単一性そのものから，あらゆる付帯性［偶有］を除去する［取り去る］ことである。あるいは，抽象とは一方を他方から分離することである，そして，他方では受け入れられなかった一方を受け入れることである。あるいは，抽象とは，それがその内に存するとこ

8）Giacomo Zabarella, Liber de mente agente, *De rebus naturalibus,* Liber XXVIII, Edited by José Manuel García Valverde, « Fragmentos de filosofía » nº 9 (2011). Suplemento de textos.

9）« Abstractio est actio intellectus, quo separat à phantasmatibus seu visis universale & ipsum denudat omni materiali conditione. Vide Zabarellam de mente agente cap. 6. » (p. 13 r)

ろのものを除いて，何かあるものを考慮することである。あるいは，抽象とは，限定されたあらゆる条件から，精神によって離されたものと私たちが考えているものである。あるいは，抽象とは，その本性の純粋性において，あるものを考察することである。したがって，私は，人間について考察することすらなく，奴隷を知解することができる。これは，基体から付帯性［偶有］を抽象することである。なぜなら，その本質は，その基体の本質とは異なるものであるからである。スコラ学者たちは［これを］切り離しの抽象（Abstractio præcisionis）と呼ぶ。・・・（p. 14 l）

ここには，極めて多様な抽象の定義が登場することにまず目が行く。その中で，ある事物の感覚像から普遍を分離し，あらゆる偶然的要素を取り除くことで，その事物の純粋な本性を知解することを可能にする精神による抽象が，スコラの哲学者たちによって「**切り離しの抽象**」と呼ばれていたことがこの箇所から明らかである。

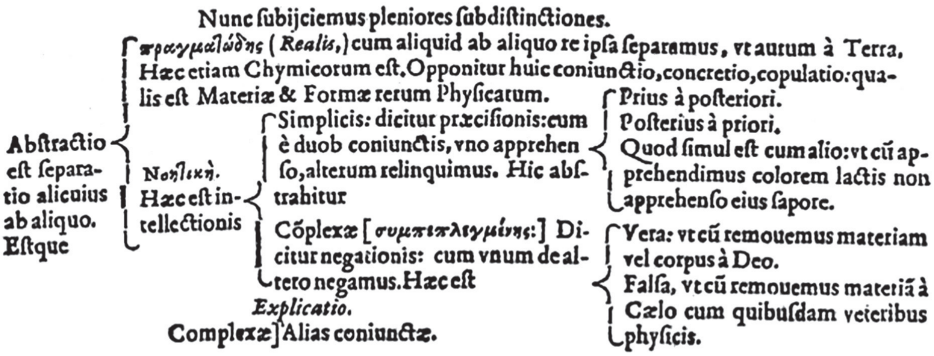
また，アヴェロエスの抽象の考えとして，「抽象することとは，知性によって可能態としてある可知的なものを現実態としてある可知的なものにすることである」が紹介され，「端的には，抽象することとは可知的なものを形作ることである」と述べられている[10)]。

ゴクレニウスは，以上をまとめて，「抽象，分離，分割」とは，「精神的なもの，いわば，それは知性あるいは理性［思惟］によってある。／実在的なもの，形而上学では，それは「本当にあるもの」（ὄντως）であり，また事物そのものである」（p. 14）とし，**精神的な抽象**と**実在的な抽象**を区別する。そして，精神的な抽象をさらに「一般的なもの，論理学」と「特殊なもの，数学」とに区分している。この区別の説明として，「精神の抽象」は，しばしば付加なしの絶対的抽象と言われるとする。論理学的な抽象は，特質［性質］が基体と事象によって異なるときに，精神によって基体から特質が分離されることを言う。そして，形而上学的な抽象ということで，個物から分離された普遍について言われるが，それは存在しないとされる。ここから，ゴクレニウスがアリストテレス主義的な抽象理論を採用し，実在論（実念論）を支持していないことが伺える。では，ゴクレニウスはどのような抽象の立場を認めているのだろうか。

10）アヴェロエスの抽象の考えについては，以下を参照。アダム・タカハシ（2021）「中世哲学における抽象的認識：アヴェロエス，トマス・アクィナス，ドゥンス・スコトゥス」，池田真治（編），『抽象の理論をめぐる哲学史――古代から近代まで――』，pp. 30−49。それによれば，アヴェロエスは，アリストテレスの「抽象する」（abstrahere）という言葉を，事物の形相が質料から切り離されている状態を説明するために用いた。また，感覚の対象が外的事物としての可感的対象であるのに対して，知性の対象が表象能力の内に存する「志向的概念」（intentio）であるとした。そして，アヴェロエスにおいて，「抽象すること」が単に形相を質料から切り離すといった意味を超えて，この志向的概念が現実的な可知的対象へと転じることこそが抽象の本義となるが，その転換の作業を行うものとして「能動知性」が導入された。

「**精神の**」抽象ということの説明で，ゴクレニウスが「抽象の，つまりアパイレシスの使用（このことは，他方なしに一方を考察すること）は，虚偽であるというわけではない」としていることが重要であろう（下線強調筆者）[11]。これは，トマス・アクィナスおよびトミストに帰されるスコラの公理である。すなわち，基体から分離しては存在しないとして，適切に抽象が使用されている場合には，抽象は真理に役立つものとされるのである。この考えは，まさにデカルト（派）やライプニッツが受け継ぐところの「精神の抽象」の考えである。

欄外に「抽象することとは何か？」（*Quid est Abstrahere?*）とあるところの以下の箇所で，ゴクレニウスは図表を用いて諸定義の再整理をしている（p. 14，下図参照）。



それによると，「抽象とは，何かあるものから何かあるものを分離することである」。その下位区分として，「**実在的** πραγματώδης (Realis)」抽象と，「**知性的** Νοητικὴ (intellectionis)」抽象がある。**実在的抽象**は，大地から金を分離するような化学の事例のように，何かある事物そのものから，何かあるものを分離する場合に言われる。この実在的抽象の対義語として，自然的事物の結合，凝結，連結がある。

他方で，**知性的抽象**は，「単純的」と「複合的」にさらに下位区分される。**単純的抽象**は，「切り離し」とも言われ，連結した二つのものから，一方を理解し，他方を理解しないまま残した場合である。例えば，私たちが牛乳の色を理解しながらその味を理解しない場合が例として挙げられている。**複合的抽象**は，否定の［抽象］とも言われ，一方を他方によって否定する場合

11）« Abstrahentium seu ἀφαιρέσει utentium (*hoc est unam rem sine alia considerantium*) non est mendacium » (p. 14 r)

である[12]。この場合，否定される側の概念も，何らかの仕方で捉えられてなければならないから，「複合的」な抽象なのである。複合的抽象の例として，神から質料または身体を取り除く場合が真であり，（古代に議論されたように）天から質料を取り除く場合が偽とされるとある。

図表以下では，「学問における抽象」（ABSTRACTIO IN SCIENTIA）など，抽象のより専門的な使用が挙げられている。例えば「学問における抽象」の項では，「あらゆる学問における抽象は，個別的なものから普遍的なもの［を抽象すること］である」とされる。そして，個別的な学問における抽象の定義として，数学の場合，抽象は「質料から形相を理性［思惟］にしたがって」なされ，抽象は理性的［概念的］であるとされる。それに対し，形而上学の場合，抽象は「質料から形相を事物にしたがって」なされ，抽象は実在的であるとされる。抽象を事物による仕方と思惟による仕方に分ける規定は，エウスタキウスの抽象概念にも見られる（第3節）。

2. ミクラエリウスにおける抽象

次に，ドイツの哲学者・神学者・史料編纂家であるヨハンネス・ミクラエリウス（Johannes Micraelius, 1597−1658）の『哲学レキシコン』（1662）を取り上げたい[13]。これは，先に見たゴクレニウスのものと比べると，より簡潔で典拠の記述にも乏しいが，内容的にはほとんど同様の記述が見られる。ただ，微妙な変更も見られる。また，抽象の様々な下位区分を簡潔に整理している。

まず，次のように一般的な定義が紹介される。

> **抽象**，アパイレシスとは，事物からの実在的分離であるか，単一の事物について他の事物なしに考察することであるか，あるものの他のものについての否定である。／したがって，**抽象**とは**実在的**であるか，**知性的**であるか，**否定的**すなわち**分割的**であるかである。[14]

ここでも，ゴクレニウスと同様に**実在的抽象**と**知性的抽象**が区別されていることが確認でき

12）デカルトにおいて，この種の両者の比較を含むタイプの抽象は，実在的区別を導く「排除」ないし「否定」として，「知性の抽象」とは明確に区別される。この詳しい分析については，池田真治（2021）「デカルトの抽象理論：近世スコラ哲学およびデカルト派の論理学との比較を通じて」『抽象の理論をめぐる哲学史』，pp. 63−119 を参照せよ。

13）Micraelius, *Lexicon Philosophicum* terminorum philosophis usitatorum. Stetini: M. Höpfner, 1662, pp. 7−11.

14）« ABSTRACTIO, αφαίρεσις, est vel à re realis separatio, vel unius rei sine altera consideratio, vel unius de altero negatio. / *Abstractio* igitur est vel *realis, vel intellectualis,* vel *negativa seu divisiva.* » (*Ibid*., p. 7)

る。注目すべき異なる点としては，ゴクレニウスでは知性的抽象の下位区分であった複合的抽象である**否定的抽象**が，３番目の抽象として上位区分へと昇格していることである。

また，「精神的抽象」という規定がここでも見られるが，それは知性的抽象の別の呼び名にほかならない。「知性的／精神的抽象」は，知性の助力によって完成されるもので，「精神の切り離し［捨象］」すなわち「切り離しによる抽象」（abstractio præcisiva）とも呼ばれる。またそれは，「単純性の抽象」と同一とされる[15]。これに関連して，「定義の抽象」もあるとされる。

その後の箇所では，自然学的抽象（abstractio physica），数学的抽象（abstractio mathematica），形而上学的抽象（abstractio metaphysica）というように，学問における抽象が区別されている。「自然学的抽象」は，単一の特徴的な感覚的質料からの普遍の抽象（abstractio universalis）と言われる。これは，知性において普遍を作成する作用でもあるから，「切り離しの抽象」とも言われる。「数学的抽象」は，「感覚的質料から，事物によってではなく，理性的推論にしたがって，量を抽象する」[16]。また「形而上学的抽象」は，「あらゆる感覚的質料から，事物および理性［思惟］にしたがって，存在を抽象する。したがってすべての質料を否定する」[17]。つまりどのような対象を抽象するかによって，抽象が学問ごとに分類されている，あるいは逆に，抽象のタイプとレベルによって学問が分類されているのである[18]。

この他に，理性［思惟］による抽象として，基体における実在から偶有を抽象する「基体からの抽象」（Abstractio à subjecto）や，関係的な「基礎からの抽象」（Abstractio à fundamento），基体から属性を形相的に抽象する「等しいものからの抽象」（Abstractio ab æquali），このもの性のように，何も残さない抽象である「最高的抽象」（Abstractio ultimata）などが挙げられている。これらは理性による抽象を，その抽象度の段階において区別したものである。そして，抽象の最後の例として，哲学者が用いる適切になされた抽象に対立する，虚偽のものである「不適切になされた抽象」（Abstractio prave facta）が挙げられている。ここには，抽象の適切／不適切の区別がゴクレニウスより受け継がれていよう。

15）« *Abstractio intellectualis, mentalis* est, quæ ope intellectus perficitur, & ob id dicitur *præcisio mentis* seu *abstractio præcisiva*, qua ex quibusdam conjunctis unum apprehendo, non apprehenso altero: item *abstractio simplicitatis.* » (p. 8)

16）« *Abstractio mathematica* à materia sensili, non secundum rem, sed secundum ratiocinationem, abstrahit, quantitatem : … » (p. 8)

17）« *Abstractio metaphysica* abstrahit esse ab omni materia sensili secundum rem & rationem: adeoque negat omnem matriam. » (p. 9)

18）抽象された事物に応じた学問の分類は，アリストテレスに由来する。例えば，数学者は，あらゆる感覚的なものを剥ぎ捨て，ただ量的なものと連続的なものについて，それらを存在としてではなく，各々，量的として，連続的としてのかぎりにおいてのみ研究する。また，存在する諸事物を，存在としてではなく，運動する事物として研究するのが自然学である。他方で，存在を存在として研究するのが形而上学である（『形而上学』1061a29−b33 参照）。

3. 近世スコラからデカルトへ

近世スコラ，とりわけイエズス会は，デカルトやロックをはじめとする近世を代表する哲学者たちへと中世思想の伝統を伝え，中世から近世へと橋渡しする重要な役割を担った。17世紀における，スコラの伝統に代わる「新しい哲学」の潮流において中心的役割を果たしたデカルトへの影響という観点では，コインブラ大学を拠点としたイエズス会派，すなわちコインブラ学派の哲学者たちが挙げられよう。その中でも，われわれが主題とする抽象の問題との関連では，基本的にはトマス主義に立ちつつも，スコトゥスやオッカムの思想も織り交ぜつつ独自の立場も主張し，スコラ学的形而上学を体系化したフランシスコ・スアレス（Francisco Suárez, 1548−1617）や，「ポルトガルのアリストテレス」と言われ，アリストテレスの全著作に対する註解であり教科書として用いられた『コインブラ注解』の編纂を主導したペドロ・ダ・フォンセカ（Pedro da Fonseca, 1528−1599），そしてイエズス会のスコラ=アリストテレス主義をローマに普及させたトレドのフランチスクス（フランチスクス・トレトゥス；Franciscus de Toledo / Toletus, 1532/39−96）などが重要な役割を果たしたと考えられる[19]。

ここでは，17世紀スコラ哲学の抽象概念として，デカルトへの影響という観点から重要な役割を果たし，またスコラにおける抽象の概念について考えるさいに，おそらくデカルトが真っ先に念頭においていたであろう，エウスタキウス（ユスタッシュ；Eustachius à Sancto Paulo, 1573−1640）の抽象概念について触れたい。

エウスタキウスは，シトー会派に属す17世紀のスコラ・アリストテレス主義者であり，ソルボンヌの哲学教授であった。その包括的な著作『哲学大全』（1609）は，17世紀前半に学校や大学の教科書として広く用いられ，デカルトもまたしばしば参照し，「このタイプの書物としては至上のもの」だと絶賛したことで知られる[20]。その『哲学大全』第IV部は形而上学にあ

19）スアレスの抽象概念については，前掲の池田真治（2021）「デカルトの抽象理論：近世スコラ哲学およびデカルト派の論理学との比較を通じて」，pp. 90−96 参照。またトレトゥスの抽象概念については，池田真治「ライプニッツの延長概念と抽象の理論」『富山大学人文学部紀要』(69) 1−16（2018）で少し触れている。フォンセカは，抽象することを，「或るものから（他の）或るものを分離することにほかならない（Abstrahere nihil est aliud, quam aliquid ab aliquo modo aliquo separare）」とし，また，ここで扱った 17 世紀のスコラ哲学者たちに先立って抽象を「実在的抽象（Abstractio realis）」，「否定的抽象（Abstractio negationis）」，そして「切り離しの抽象（Abstractio praecisionis）」の三種に分類している（『アリストテレス『形而上学』注解』[CMA], v. 2, c. 999）。そこには，ゴクレニウスやミクラエリウス，そしてエウスタキウスの抽象概念の原型が見られる。その詳しい分析のためにはまた機会を改めて論じる必要があるが，João Madeira, “Pedro da Fonseca’s *Isagoge Philosophica* and the Predicables from Boethius to the *Lovanienses*”, Ph. D Thesis, Katholieke Universiteit Leuven, Nov. 2006, とりわけ Ch. III – Internal Senses and Abstraction が参照されねばならない。

20）*Descartes’* Meditations: *Background source materials*, Ed. by Roger Ariew, John Cottingham, and Tom Sorell, Cambridge University Press, 1998, p. 68.

てがわれ,「存在の概念」を扱った第一論議で，概念の存在のあり方が問題にされる[21)]。それに関連して，ジルソンが編集した『スコラ=デカルト索引』の「抽象」の項では,「切り離して認識すること」（Præcise cognoscere）とあり, エウスタキウスの『哲学大全』からの引用がある。

> さらに，細心に注目すべきことは，それぞれの概念，つまり形相的概念と想念的［対象的］概念とが，二つの仕方によって，すなわち事物による仕方と思惟による仕方とによって，他のものから切り離された，と言われうることである。事物によって切り離されたと呼ばれるのは，それから切り離されていると言われるものから，事物によってそれ自体を区別されたものである。そのようなものが形相的概念であり，それによって私が個別の人間を理解するところのそれらの概念の顧慮によって，私は普遍的人間を理解する。というのも，それらは互いに実在的に異なる精神の作用だからである。それゆえプラトンは，人間一般という想念的概念が，個々の［人間の］想念的概念から実在的に切り離されていると誤って想定した。他方で，思惟によって切り離された概念あるいは抽象による概念と言われるのは，その概念のうちに思惟によって，それら概念から切り離されたところのそれらの概念の特殊性をしか含んでいないものである。したがって，人間の概念を一般的に考えることで，形相的概念と同様に想念的概念とが，それぞれ切り離されることが明らかである。それによって私が人間を一般的に考えるところの形相的概念のうちには，いかなるより劣位にある個別的な存在性の表象［表象像］も含まれていないのであり，また，普遍的人間という何性それ自体のうちには，個別的で特有な何か或るものは含まれていないのである。[22)]

21）エウスタキウスの形而上学については，村上勝三「デカルトと近代形而上学」『西洋哲学史Ⅲ「ポスト・モダン」のまえに』神崎繁，熊野純彦，鈴木泉［責任編集］，講談社選書メチエ，2012 年，pp. 147−194 参照。

22）Étienne Gilson, *Index scolastico-cartésien*, Paris : J. Vrin, 1979, p. 1; Eustachius à Sancto Paulo, *Summa philosophiæ*, Paris, 1609［以降から SP と略記］, IV, Prima pars, disp. 1, qu. 2, pp.11−12. : « Præterea diligenter animadvertendum est, utrumque conceptum, formalem nempe et objectivum posse dici ab alio præcisum duobus modis, re nempe et ratione. Præcisus re vocatur, qui est re ipsa distinctus ab iis a quibus dicitur præcisus, qualis est conceptus formalis quo concipio hominem universum respectu eorum conceptuum quibus concipio singulos homines ; sunt enim actus illi mentis realiter inter se diversi ; sic falso existimavit Plato conceptum objectivum hominis in genere esse realiter præcisum a conceptu objectivo singulorum. Conceptus vero præcisus ratione sou abstractione dicitur in cujus ratione nihil eorum includitur quæ sunt propria conceptuum a quibus præcisus est; sicque præcisus est uterque conceptus hominis generatim spectati, videlicet tam formalis quam objectivus; nec enim in conceptu formali quo concipio hominem generatim, includitur repræsentatio ullius inferioris particularis entitatis, nec etiam in ipsa quidditate hominis in universum includitur aliquid quod sit peculiare singularibus. »

この箇所によれば，概念は，「事物による（re）仕方」と「思惟による（ratione）仕方」という二種の「切り離された（præcisus）」仕方によって理解される[23]。エウスタキウスは，概念を**形相的**（formalis）概念と**想念的**［対象的］（objectivus）概念に区別する[24]。エウスタキウスにおいて，**形相的概念**は，事物によって［実在的に］切り離されたものであり，それによって人間が想念的概念をもつところのそれ自体である。あるいは，「形相的概念とは，事物を表象するために生み出される，知性によって知得されるその事物の現実的な類似性である」[25]。例えば，それによって普遍的人間が，個々の人間の概念の考慮ないし反省によって理解されるところの一般概念である。つまり，人間が理解した一般概念そのものはあくまで想念的概念であり，それとは実在的に区別される事物における根拠として，形相的概念がある。他方で**想念的概念**は，もう一つの「切り離し」の仕方である，「思惟による仕方」すなわち「抽象」に依存している。理性によって切り離された概念あるいは抽象による概念は，その概念のうちに，思惟によって事物から切り離されたところのそれらの概念の特殊性をしか含んでいないものであり，いかなる個別的な存在者の表象や特殊性も含んでいない形相的概念すなわち普遍的概念と実在的に区別される。こうしてエウスタキウスは，想念的概念と形相的概念の捉え方が，実在的に異なる精神作用であるとする。これに関して彼は，人間一般という想念的概念が，個々の人間の想念的概念から実在的に切り離されていると誤って想定したとして，プラトンを批判している[26]。

また，ジルソンの同書「普遍」の項でも，エウスタキウスの『哲学大全』が引用され

23）præcisus（切り離された）とは，「切り離す，切り取る，切り詰める，短くする，取り除く」という意味をもつ præcido の受動分詞が形容詞化されたものである。

24）本稿では十分扱うことができないが，スコラ哲学から近世哲学への対象的概念の系譜については，山内史朗『「誤読」の哲学　ドゥルーズ，フーコーから中世哲学へ』青土社，2013 年が参照されねばならない。

25）SP, IV, p. 10: « Est autem formalis conceptus actualis similitudo rei quæ intelligitur ab intellectu ad eam exprimendam producta, ... »

26）プラトンにおけるイデアは，事物から単に思考上で切り離されているものとしてではなく，存在者から実在的に切り離された実体として，離れたもの，離在，離れて存在する（χωριστόν, χωριστός, χωρὶς εἶναι）ものとしてある。これは，それだけで独立に存在するものである。他方でアリストテレスにおいて，イデアないし普遍的・抽象的諸概念は，事物から独立離存的に存在しうるものではなく，実体にその基礎を有するもの，つまりその存在を依存するものだと考える。そして，その存在を感覚的事物に依存しつつも，そうした存在に関する原理的・原因的問題（つまり形而上学）から切り離して，一部の性質にのみ注目する「抽象」という知性認識のあり方においてのみ成立するものとして，数学的対象などの抽象的存在者の存在を認める。本稿では扱えなかったが，抽象（アパイレシス）と共に，離在（コーリストン）の概念史もまた並行して検討しなければならない。

ている[27)]。

> 普遍が認識されうるためには，それらが知性の操作によって，自らよりも低位にあるものどもから抽象されなければならない。それを理解するためには，一方のものの他のものからの分離にほかならない抽象が，実在的，否定的，捨象的［切り離し］の三種であることに注目せよ。実在的抽象（Abstractio reales）とは，例えば身体からその部分［四肢］が切り取られる場合のように，或るものが他の或るものから実在的に分離されることである。否定的抽象（Abstractio negationis）は，例えば，あなたが「カラスは白色ではない」と述べるときのように，命題において一方が他方から否定される場合である。それから切り離しの抽象（Abstractio præcisionis）とは，例えば人間の身体について，その人の単一の魂から無視して考える場合のように，結合している二つのうちの一方を，他方の残余によって把握する場合になされるものである。したがって，普遍性は知性の操作によって個別的なものから抽象されているので，このことは実在的抽象によっては行われてはおらず，普遍性は実在的には個別的なものから区別されないのである。また，普遍性がそれ自らよりも劣ったものから肯定されるのを常とするように，否定的抽象によってではなく，切り離しの抽象によって，つまり，個別的なものの差異を放棄することによって，共通している単一のものが魂［精神］によって思考されるのである。

エウスタキウスは，普遍の認識を論じた文脈で，普遍が知性の操作によって自らよりも低位にあるものどもから抽象されなければならないが，そのことを理解するためには，三種の抽象として，**実在的抽象**と**否定的抽象**，そして**切り離しの［捨象的］抽象**を区別する必要があるとしている（この分類は，フォンセカのものを踏襲している）。そして，これらの抽象のうちで，普遍の認識に関わるのは，実在的抽象でも否定的抽象でもなく，切り離しの抽象であると結論

27）Gilson, *op. cit*., p. 308; Eustachius, SP, IV, Quarta conclusio, p. 49: « Ut universalia cognosci possint, necesse est ut per operationem intellectus abstrahantur a suis inferioribus. Quod ut intelligas, nota abstractionem quæ nihil aliud est quam unius ab altero separatio, triplicem esse, nempe realem, negationis, præcisionis. Abstractio realis est qua aliquid ab alio realiter separatur, ut cum membrum a corpore resecatur. Abstractio negationis, cum unum de altero negatur in propositione, ut si dicas: couvus non est albus. Abstractio præcisionis tum fit cum e duobus conjunctis unum, altero relicto apprehendimus, ut si prætermisso hominis corpore de solo ejus animo cogites. Cum igitur universalia per operationem intellectus abstrahuntur a particularibus, hoc non fit per abstractionem realem, cum Universalia non distinguantur realiter a particularibus; neque per abstractionem negationis, cum universalia de suis inferioribus affimari soleant, sed per abstractionem præcisionis, cum videlicet, relictis particularibus differentiis id solum quod commune est animo concipitur. »

している。

また,『スコラ＝デカルト索引』の補論にある「抽象」の項では,「抽象は二つの仕方でなされる。1. 判断の仕方によって。xはyの内にない，あるいはyとは別に存在する。2. 単純な把握の仕方によって，つまり，yを考えることなくxを認識する」とされる。この典拠として，トマスの『神学大全』の次の箇所が挙げられている。

> 抽象する（abstrahere）ということに二通りある。一つは，複合とそして分割という仕方によるものであって，我々が「何者かが他の何ものかにおいてあらぬ，乃至はそのものから離れてある」ものなることを知性認識する場合がそれにあたる。いま一つは，単純にそれだけとして見るという仕方によるものであって，我々が一つのものを知性認識するにあたって他の事柄については考えないという場合がそれである。（I, 85, 1）[28]

このトマスによる二種の抽象の区別は，ゴクレニウスの辞典にある単純的抽象と複合的抽象という二種の知性的抽象の区別にその影響が見られよう。またデカルトとの関連では，次のジルソンの指摘が的確である。「能動知性がその作用によって可知的形象を感覚像から抽象するという意味での抽象は，デカルトの著作には見られない。デカルトによれば，一般観念は可感的なものからは抽象されず，生得的なものだからである」[29]。つまり，アヴェロエス＝トマス的な方向での抽象理解をデカルトは拒否する。このことが意味するのは，事物の感覚から知性へという抽象の道を断ち，知性の内なる観念から普遍的な本性認識を立ち上げる直観の道への転回にほかならない。また，ジルソンによれば，デカルトが「抽象」［という用語］を用いるのは常に「別なものとして［切り離して］考察する」という意味においてであるとされる。これは，本稿で見たように，抽象のスコラ的定義に見られる「精神の抽象」にほかならない。もちろんジルソンもまたこのことを看破しており，この，ある名辞を別の名辞から切り離して，その肯定も否定もなしに認識される抽象作用は，まさしく「切り離しによる抽象」（abstractio

28）トマス・アクィナス『神学大全』第6冊，創文社，1962年，第85問題，第1項，290頁。邦訳ではabstrahereを「切り離す」と訳しているが，ここではprælisioを「切り離し」として，abstractio「抽象」と区別して訳している都合により，abstrahereを「抽象する」と訳した。

29）E. Gilson, *Index scholastico-cartésien,* Seconde édition, J. Vrin, 1979, p. 339.

præcisiva）であるとしている[30]。

デカルトは，こうしてスコラにおいては多様な意味内容を持っていた抽象の概念を，精神ないし知性の切り離しによる抽象へと単純化して受容することになる。デカルトには，「抽象」（abstractio）とは明確に異なる概念として，実在的区別（distinctio realis）を導く知性の作用である「排除」（exclusio）の概念があるが，これは，自らの哲学体系の構築のために，スコラの抽象概念に含まれていた精神の操作を，分解して独立させて，独自の意義をもたせたものにほかならない。デカルトの抽象理論およびそれと近世スコラの抽象理論との比較については，稿を改めて論じなければならない。

おわりに

以上，ゴクレニウス，ミクラエリウス，およびデカルト的文脈としてエウスタキウスに注目して近世スコラにおける「抽象」の定義とその分類を見てきたが，かなり煩雑な印象しか残っていないかもしれない。そこで，最後に本稿の簡単な整理を与えておきたい。

まず，17 世紀スコラの一般的言説で確認できたのは，**抽象の多義性**である。ゴクレニウスもまたその辞典の抽象の項の冒頭で，抽象は一つの仕方では言われないと述べていたように，抽象の内容は複雑であり，その用語は様々な学問の文脈で用いられていた。近代以降，抽象はスコラで扱われたその豊富な概念的内容を失っていき，アリストテレス的な抽象主義――すなわち，感覚経験からの知性の抽象を通じて事物の本性ないし普遍が把握されるとする立場――がほとんど一枚岩で理解されてきた側面があるように思われる[31]。しかし，本稿における抽象の分類に見たように，近世スコラにおいて抽象は，いまだ極めて多義的な内容をもつ概念だったのである。

次に，そうして抽象の働きが多様に区別される中で，抽象の大きな二つの分類として，知性

30）ジルソンは，この点に関して，次の参照を指示している。Jean Rohmer , « La théorie de l’abstraction dans l’école franciscaine d’Alexandre de Hales à Jean Peckham », AHDLMA, 3 (1928) 105−184. この論文でローメルは，フランシスコ会派における抽象の理論について，とりわけアリストテレス的な抽象説とアウグスティヌス的な照明説の関係を論じる。ヘイルズのアレクサンダー（c. 1185−1245）は，13 世紀前半当時における，感性的認識に対して知性的認識を重視するアウグスティヌス主義という権威ある神学と，アヴィセンナやアヴェロエスらアラビアのアリストテレス主義の西欧への流入によってもたらされた新しい認識論の影響を受けており，それらの調停を試みた人物である。

31）例えば，次を参照。エルンスト・カッシーラー『実体概念と関数概念：認識批判の基本的諸問題の研究』，山本義隆訳，みすず書房，1979 年，とりわけ第一章「概念形成の理論によせて」。カント以降におけるアリストテレスの抽象主義については，池田真治（編），研究報告論集『抽象の理論をめぐる哲学史――古代から近代まで――』に所収の浅野将秀・五十嵐涼介「カントとロッツェの抽象主義批判」を参照。また，カッシーラーのアリストテレス解釈に偏りがあることの問題については，同論集の酒井健太朗「アリストテレスの抽象理論の射程」に指摘されている。

的抽象と実在的抽象の区別があることを確認できた。**知性的抽象**とは，事物の感覚像から普遍を切り離し，そこから個別的な質料的差異を取り除くことで事物の本性ないし本質を知性認識することを可能にするような精神の知性的はたらきである。他方で**実在的抽象**とは，土から金を抽出したり，身体からその部分である四肢を切り離したりするように，現実に存在する事物そのものから，実在的に，つまり事物としての何かあるものを分離することである。知性的抽象は，「切り離しによる抽象」や「精神の抽象」といった名称の変容や，用語の位置付けの変動はあるが，知性的抽象と実在的抽象の区別そのものは近世スコラ哲学の文脈で一貫して受け継がれているものである。本稿は17世紀における抽象概念に焦点を当てているので，他の時代は十分に取り上げることはしないが，18世紀初頭に出版され西欧で広く用いられた，ショウヴァンの『哲学レキシコン』においても，実在的抽象と理性［思惟・概念］的抽象が区別されている[32)]。また，本稿において「切り離し」ないし「捨象」と訳したpræcisioについては，近代では，C. S. パースにおいて「前切」（precision）として独自な意味を伴って復活するに至る[33)]。

ここでは，近世西欧スコラにおける抽象の概念のすべてを扱いきれたわけではもちろんないが，当時一般的に参照された哲学辞典を中心に，抽象のスコラ的概念を背景として踏まえることで，デカルト以降の抽象理論の伝統からの距離を測ることや，独自性をより精確に評価できるであろう。本稿は，近世西欧哲学における抽象の問題について，当時の思想的状況をより踏まえて検討するためのあくまで予備的な作業であった。

32）Stephanus Chauvin, *Lexicon Philosophicum*, Leovardiæ [=Leeuwarden]: Franciscus Halma, 1713, pp. 2 r−3 r.

33）Jimmy Aames,「前切と実体的抽象化：パースにおける抽象の理論」『抽象の理論をめぐる哲学史』, pp. 159−176。